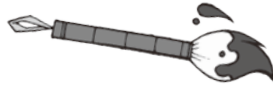


新・下野市風土記

十干十二支



下野市教育委員会 文化財課

皆さんに、今年の干支は？と尋ねたら、「寅年です」と答えていただけることでしょう。

我々には干支として馴染み深い十干十二支は、元々は古代中国（殷の時代：紀元前15～11世紀）から使われてきた暦法上の用語です。

十干十二支で言うと、今年（みずのえとら）は、正式には壬寅の年にあたります。

十干は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の総称で、10日ごとに循環する日（10進法）を表示する数詞として用いられた用語です。この10日で太陽が一周することを「旬」といい、ひと月を上旬、中旬、下旬と区分するのは、この考え方が元になっているようです。

ちなみに、古代エジプトの暦でも10日=1週間、1か月=30日=3週間とされていました。

古代中国で、この十干に五行思想（五行説）が結びつきました。五行思想とは、自然の摂理の中で万物は火・水・木・金・土の5種類の元素からなるという思想です。

五行の木は、春を表します。火は夏を、土は

季節の変わり目（春夏秋冬の土用）を、金は秋を、水は冬を象徴しています。

十干をこの五行に当てはめると、

甲・乙=木 丙・丁=火 戊・己=土
庚・辛=金 壬・癸=水

となります。また、五行を方位に当てはめる考え方があり、さらに、この五行による方位には、それぞれシンボルカラーがあります。

木=東=青（緑） 火=南=紅（赤）
土=中=黄色 金=西=白
水=北=玄（黒）

この思想は、7世紀末から8世紀初頭頃に築造された高松塚古墳の石室の壁画にも表れています。東に青龍、南に朱雀、西に白虎、北に玄武（亀と蛇からなる霊獣）、土の方位である中央に麒麟や黄龍（金龍）が描かれています。

中国の皇帝を示すデザインや日光東照宮陽明門の彫り物に龍が使われているのも、青春・朱夏・白秋・玄冬といった用語や北原白秋の雅号なども、この考え方が元になっています。

周の時代（紀元前11～3世紀）になると、十干は十二支（12進法）と組み合わせられ、時間と空間、年と日を表す言葉として使用されるようになります。

古代中国の天文学では、太陽が黄道（天球上における太陽の通り道）に沿って1周する期間を1年とし、この間に太陽は12個の星座の中を通り抜けていきます。この天球を、この赤道帯に沿って東から西に12等分したものを十二辰と呼び、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支の名称が使われました。

十干十二支が一周することを還暦といい、60歳を祝う還暦も、ここからきています。

右図のとおり方位が十二支に配されていますが、このうち北東（丑寅=艮）を鬼門、南西（未申=坤）を裏鬼門と呼び、鬼が出入りする方角として避ける習わしがあります。艮が12月から1月、坤が6月から7月という季節の変わり目に相当する方位で、体に変調が出る時期に当たることに由来しています。

